

私たちの忘れ物

價 ヨリ(果川外語)・最優秀賞

こんにちは。話を始める前に、みなさんにひとつお聞きしたいと思います。みなさんは、自分の忘れたものが何か覚えていますか。何かを忘れるということ。普段それは物の置き場を忘れることの意味として使われています。それと、もうひとつの意味があります。ここに何かがあったこと自体を忘れることです。前者の場合、忘れてしまったその物を置いた場所を思い出したら問題はすみません。では、後者の場合はどうなのか、考えたことがありますか。

早いもので、私が今の学校に通うようになってから迎える三回目の夏です。入学してからはじめは、家から一時間かかる遠いところまで毎日行かなければならないことに慣れにくかったのです。

学校勉強のことは置いて、どうして朝日ものぼってない時間に家を出て、星が見られる時間に戻らなければいけないのか。そういうことを考えながらも三年を過ごしてきて、今になっては一日中室内に閉じこもることが当たり前にも思えるのです。これが適応といえるものかどうかはともかくとして私は、いや私だけでなく、ほとんどの高校生がそうだと思いますが、太陽を、そして空を見上げることを忘れてしまいました。

夏休みにはいってあまりたっていないある日、私は午後遅く友だちと映画を見ることになりました。映画が終わり友だちとも別れ一人でバスに乗って帰ろうとした時はもう周りは完全に暗くなっていました。

珍しくも星の多い夜だな、と関心していて、近いところまで行ってみるとそれはマンションの明かりだったりすることはあまり愉快ではありませんでし

たが、それにもかかわらず私はとても上機嫌でした。バスの窓際の席に座り、ぼおっと眺めていた夜空には、真ん丸の月がのぼっていたのです。

綺麗で、美しい、鮮やかな黄色い月。いや、それははっきりといい切れる言葉などはもう思い浮かばない、ただ目を奪われること以外何もできない、そういう感じの月でした。空の色は濃い紺色で、その薄暗い空気のなかで月が輝いています。それは奇妙でした。

後で知ったことなんですが、その日はブルームーンという、何年おきに一度、一月に満月が二度のぼる日だったそうです。私とそのブルームーンを見たのはただの偶然に過ぎないことなのでしょうが、私にはそうは考えられません。その日の、その月でなかったら、私はそういう気もちにはなえなかったでしょう。もしかすると、二度と空なんて見上げなくなっているのかもしれないと、そう考えます。

中学生の時はそう時間に追われることがなくて、学校が終わるといつもゆっくりと歩いて家に帰りました。そしてそのたび、時々空を見上げました。午後の空は割合に青く、清く、その真下を私は歩いている。それはとても気持ちいいことで、その時の空は都市で暮している私が見られる唯一の、文字通りの自然でした。

空とは昔からのすべての人間の夢であって、そういった大げさな表現を使わなくても、子ども時代、誰もが一度ぐらい空を飛ぶことを夢見ていたのでしょう。もう一度、振り返ってみましょう。都会での忙しい毎日をおくっている私たちはみな、大事にしていた何かを忘れていてのではないのでしょうか。

より良い未来のために

林 廷恩(果川外語)・金賞

みなさん、こんにちは。ご存知でしょうが、外国語の学習にはその国の人とのコミュニケーションが一番効果的だそうです。人間と人間の交流で得られるものは、単に語学の実力だけではありません。日本人の友だちとメールを取り交わしたり、チャットでお互いの意見を話しあったりしたことは、私にとって何よりも大事な体験であります。

今日は、私の友だちの一人から送られてきた一通の感動的なメールについてお話ししたいと思います。私の友だちはメールフレンドです。

ある日、私は彼女に真剣なメールをだしました。個人的に歴史に興味のある私は、反韓感情をもっている日本人と歴史について話しあってから、ちょっと憂鬱になっていました。私のメールフレンドはみんないい人で、韓国をよくしてくれますけど、本当は韓国を嫌がっている日本人がずっと多いのではないかと不安になっていました。同時、せめて植民地時代に犯した過ちは認めるべきではないかと、腹を立てたりしていました。彼女は どう思ってるのか気になってメールをだしてみましたが、どんな反応が戻ってくるのか心配になりました。

そして翌日、メールボックスには彼女からのメールが届いていました。少し緊張しながらメールを読んでいった私は、知らない間に涙を流してしまいました。メールの内容が、あまりにも優しくてうれしかったからです。

そのメールには、韓国人の夫と歴史の問題で言い争ったこと、韓国人でもあり日本人でもある息子の将来についての心配、そしてそんな経験を通して彼女がだした結論が、真率に書かれていました。

最後には、こんな文章が書かれていました。「過去の歴史は変わりません。でもそれを土台に新しい歴史をつくっていかねばいけないのが

現実です。私たちの子どもも新しい歴史によって生まれてきたと思いますから。」

この文章で、私は韓国と日本の将来への希望をみました。彼女の子どもについては、かわいくてよく笑う幼い男の子だと、写真といっしょに、話を聞いたことがあります。その子の顔が目の前に浮かんで来て、胸がいっぱいになりました。確かに、存在している事実は変わりません。犯した過ちを否定することはできません。日本人としてそれを認めてくれる彼女に、ありがたさを感じました。けれども、私たちが歴史を習う理由は、結局、より良い未来のため、そして二度とそんな悲しい歴史をくり返さないようにするためだと思います。彼女の子どもが生きていく世界には、ぜったい昔のような悲劇が起こらないように、微力ながら私も力になりたいと思いました。彼女の言っているように、過去を土台にして、新しい歴史をつくっていきたくて、本気で願いました。

私と彼女は今も仲のいい友だちです。彼女以外にも、たくさんの日本人たちと親しく付きあっています。時々意見の違いで論争することもありますし、韓国が嫌いだという人と出会ったりすることもあります。でも、以前のように悔しがったりすることはなくなりました。本気が伝わると、多くの人々がそれを分かってくれるはずだと思うからです。彼女のような考え方をもっている日本人が、私の周りにはたくさんいます。

今日本は韓国ブームだそうです。ドラマからはじめて、映画や歌もどんどん人気をよんでいると聞いてます。文化の交流をきっかけに、お互いの国の理解がもっと深くなって、次の世代の子どもたちはアジア人、いいえ、世界人として、韓国も日本も愛せる人になればいいと思います。ご清聴ありがとうございました。

鳥類学者「元炳旵」

金哲馨(安養外語)・銀賞

私はわたしが感動を受けた、ある学者を紹介しようと思います。彼は鳥類学者「元炳旵」。

1929年今の北朝鮮にある開城市で生まれました。彼のお父さんも当時、数少ない鳥類学者でしたので、彼は幼いころから動物に関心がありました。とくに彼はチョウに関心をもっていて、チョウについてはなにを訊いても答えられるほどでした。元炳旵は鳥類学者だったお父さんの助手になって研究を手伝いながら、彼の鳥に対する関心は日がたつにつれて特別なものとなりました。

ある日、お父さんと興南平野のあたりで観察をしていた彼はお父さんといっしょに「シベリア椋鳥」を発見しました。もともとシベリア以外には住んでいないと思われていた鳥を朝鮮半島で発見したのです。彼のお父さんである「元洪九」博士はこれを「世界鳥類学会」に報告、彼の名前は世界に広く知れわたりました。

それから何年後かの1950年、朝鮮半島に「韓国戦争」が勃発しました。彼の家族は父の洪九が北に、息子は南に分かれてしまいました。南側に来た息子の炳旵はろくな居所もなく、軍隊に入りました。1956年、軍隊での活動を終えて、彼は「農林部中央林業研究所」で本格的に鳥に関する研究をはじめました。しかし、鳥に関する資料は論外とっていいほど足りなかったのです。貧乏だった彼は外国の資料を求めようとしたのですが、値段も高く、容易ではありませんでした。そこで、彼は「日本鳥類学会」の学者たちに助力を請いました。日本側は鳥類関連の書籍、論文、激励の手紙などをおくって、「元炳旵」の研究を後援しました。

「農林部中央林業研究所」で研究をしていた、

5月のある日、見慣れている鳥一羽を発見しました。腹部が白くて、翼は銀色である鳥、お父さんの元洪九博士と発見した「シベリア椋鳥」を韓国の南側で発見したのです。北側ではお父さんが、南側では息子が今まで知られていなかった「シベリア椋鳥」の居所を探したのです。これを「世界鳥類学会」に報告した「元炳旵」はこれがきっかけになって、多くの世界の鳥類学者との関係を結ぶことになりました。研究に加速度がついた彼は博士論文により博士号を取って鳥の研究を続けていきました。

彼は17年間135種の鳥、約20万羽に指輪をはめて飛ばしました。鳥の移動経路を調査するためです。その日も彼は99羽の鳥を飛ばしていました。「JAPAN—7655」という指輪をはめた「シベリア椋鳥」といっしょに。

1965年、今は「国際鳥類連盟」になったもと「国際鳥類協会」から連絡がきました。北朝鮮のある学者が彼が飛ばした鳥を捕獲したと。指輪に書いてある情報を見て日本の学者かと思ったが「シベリア椋鳥」は日本に住んでいないので、もしかして韓国の学者が飛ばした鳥ではないか、その学者の名前を確認してほしいと。この言葉といっしょに「国際鳥類協会」は北朝鮮の学者の名前は元洪九博士だと伝えました。父とその息子の名前を世界に広く知らせた「シベリア椋鳥」が二人を連結させたのです。

数年後、元炳旵は国際会議場でお父さんの元洪九博士が息子のことを思いながら亡くなったという便りを聞きました。鳥に対する熱情と肉親間の情が二人を結んだのではないのでしょうか。

未来のこと、心配していますか?～今を生きろ!～

張 ミンジ(聖華女高)・銅賞

高校2年生の私は今夏休みを過ごしています。大学への進学をねらっている高校生にとって夏休みは、とても大事な時期だと思います。はじめて今年の夏休みを向かえた時には私もいろいろな計画を立ててだれよりも一生懸命に頑張りたいなと思いました。でも今までも何の実行もしませんでした。ただ「もう何日も過ぎたのに、何もしていなかった。あと何日なのに、どうしよう。」とか「このままでは駄目。2学期のことはどうしよう。」とか、無駄に過ごしてた過去のことを後悔したり、または後のことを心配したりしました。結局、何の成果もないまま時間は経ってしまっ、もう私の夏休みは終りに近づいています。

人はよく過去とか未来のことについて考えています。しかし、実際に私たちが生きているのは現在なのです。人は過去を生きること、未来を生きることでもできません。私たちは『今』にしか生きられません。なのに、人たちは未来に起こるかも起こらないかも知れないことに関して、不安や心配でいっぱいになりがちです。体は今を生きているのに、心は過去を向いていたり、未来を向いていたりします。もちろん、人は過去から何かを学べます。そして、明るい未来を考えるのは人の今を生きている証になるものです。でも過去と未来を考えると、人はよく否定的になります。はじめてこの大会の1次テストにパスしたことを聞いたとたん、私は「2次テストに落ちるとどうしよう。この点数では良い成績は絶対無理だろう。」と思いました。結局、私はよろこぶべき時によろこぶのを忘れてしまいました。未来の心配にあまり捕らわれると、現実はなくなるものです。

私はある日本のドラマで『今を生きろ』というセリフを聞いて、なるほど～と思いました。そして、今までもその文章は私の座右の銘となっています。それでなるべく未来のことを心配せずに今を

楽しもうとしています。私も理性をもつ人間ですので、不確実な未来を全然考えないのではありませんが、未来は今の私と結局つながっているのだと思ひながら、今を頑張つて、今を楽しんで生きて行きたいです。私は今日本語の勉強を一番楽しんでしています。

2年前、日本の大衆文化にはまってから一人で勉強し続けて、今は日本語だけのおもしろさにまたはまっています。大学入試の必修科目でもない日本語の勉強にそんなにはまって受験はどうするつもりかといわれたことも多いですが、

私は今、日本語を勉強するのが一番面白いです。自分が楽しんで日本語を勉強し続けても、完璧に上手ではないと将来の私の進路がとてせまくなるというのもよく知っています。でも私は「好きこそもの上手なれ」という諺を信じています。今の私が頑張れば頑張るほど、未来の私もかわるものだと思います。やりたいことはやることこそ、今を楽しめるための最善の方法だと思います。それは人の体と心、つまり心身とも今を生きるために必要なことです。

大人になるにつれて、私もだんだん『今』を感じることを忘れがちになるかも知れません。もちろん、学生であっても自分の未来を心配するのは当たりまえだと思います。でもここで私が話したいことは、未来のことを心配し過ぎて、今の楽しみ、今の意味を忘れてはいけないということです。未来のことを心配するより、まず今自分がやっていることにもっと自信をもってください。今だけを考えること、それは夢が無いこととは全然違います。未来は現在とつながられています。だから明日のことは本日の私次第ではないでしょうか。みなさん、自分の『今』をもっと大切にしてください。

ボランティアについて

金 棕銀(河南情報高)・優秀賞

ボランティアとは代価を求めず自発的に見知らぬ他人にサービスすることをいいます。20世紀、産業化社会になり社会的問題が多発して民間や政府の力だけで解決するのはもはや事実上不可能に近くなりました。これによって自然に誕生したのがボランティアであると私は学びました。

ある日、私は母から聞いた話ですが、その話は私にいろいろなことを考えさせました。それはある福祉館でのことです。ある日、その福祉館にボランティアの人がくる予定でした。それでその福祉館の館長がその人を待っていたわけですが、その人が約束の時間が過ぎても来ないので、館長は係員に訪ねました。

「今日いらっしゃる予定だったあの方から何か連絡はないのか？時間は過ぎているが。」その職員は困った顔で答えました。「それが…、その方がいらっしゃってはいませんが、さっきから玄関からお入りにならないのです。」「どうして？」と館長が聞くと「何かお気に入らないらしくて、ボランティアをおやめになるとかいています。」と答えました。

それで、館長は自ら玄関に出てその人に話しかけました。「私はこの福祉館の館長を勤めている者ですが、ボランティアをお止めになるとお聞きしたのですが、どうしてかお聞きしてもよろしいのでしょうか。何か都合は悪いのでしたら今日ではなく、いつでもいらしてくださいませよ。」その人は失望したような態度で「私はここにくる寸前まではやる気が満々でした。それがここにきた途端やる気が失せたんです。」といました。「それはどうしてですか？」館長が聞きました。そしてその人は「この福祉館があまりにも立派な建物

で施設もとっても立派だからです。」と答えました。その人は福祉館の建物や施設が立派だから、自分がボランティアをする必要がないと思ったと言いました。

館長は、福祉館は障害者の方々が多く来るので、その方々に不便な思いをさせないため施設を開発しているが、それでも人の手が必要な障害者の方がたくさんいると言いました。結局のところその人は返ってしまいました。その人は障害者の福祉館なら建物や施設がボロボロで可哀想だろうから自分がボランティアをやって助けてやろうという考え方をしていたのでしょう。

私もボランティアをやるにはやるんですけどそれは自発的なボランティアじゃなくて学校の宿題としてボランティア活動が時間を達せねば点数をもらえないからなのです。私ではなくてもほとんどの学生たちは私と同じだと思います。でも、ボランティアというのはそんな安っぽい同情心からやるものではなく、宿題だから仕方なくやるものでもないと、その話を聞いて思いました。

私たちは今、現代を生きる人としてボランティアの本当の意味を思い出し、その真意を貫かねばなりません。ボランティアは誰かを同情してやるものではありません。そして、自分の目的のために必要だからやるものでもありません。ボランティアは誰かのために、社会のためにやるものです。そしてそれはまた自分のためにもなるでしょう

私の話が皆さんがボランティアのことを改めて考えてみるきっかけになることを祈りながら、聞いてくださったみなさんに感謝します。ありがとうございました。

私の夢は空を飛ぶこと

朴 炫柱(釜山情報高)・優秀賞

みなさん、こんにちは。私は高校3年生です。で、進路のことも真剣に考えなくてはいけないようになりました。

それで今日私は、私の夢について話します。私の夢は子どもの頃から憧れているスチュワーデスです。女の子なら一度ぐらいはなりたいたったことがあるのではないかと思います。私がスチュワーデスになりたいと思ったのは小学生の時です。そのとき、大好きなドラマがあったんですが、そのドラマの主人公の職業がスチュワーデスでした。

あのドラマを見て「スチュワーデスの姉さんたちはカッコいいな」と思ったんです。きれいな制服、やさしい話し方など、その姿を見て私は「スチュワーデスになりたい」と思いました。子どもの頃はスチュワーデスはただカッコいい仕事だと思っていました。

中学生の時、私はスチュワーデスがどのくらい大変な仕事かわかるようになってきました。テレビでスチュワーデスになりたい女子高校生たちが直接体験をしたり教育を受けたりする番組が放送されて、私は興味ふかく見ました。それは私が想像した以上に大変にみえました。立ちっぱなしの仕事なので疲れるのは当然で、乗客をもてなすのもとても難しく、いろんな失敗で先輩に怒られたりして、泣きだす人を見ました。それを見て「カッコいい姿の背後にはやはり苦労があるのだ」と思いました。また少し怖くもなりました。でもその怖さも私の夢をくずさなかったのです。

そして私は高校生になりました。高校2年生の時に日本に行くためにはじめて飛行機に乗りまし

た。そんなに夢に描いていた飛行機に乗って、憧れていたスチュワーデスを目の前で見られると思ったら、日本に行く楽しみもあったんですが、飛行機に乗るという楽しみもすごく大きかったです。

私が乗った飛行機は国内飛行機ではなく、外国の飛行機でしたが、その飛行機にはいろいろな国のスチュワーデスがいました。そこで私の夢は少し方向転換をしました。外国の航空会社で働きたくなったのです。韓国人だけの韓国の航空会社より、外国の航空会社の方が他の国の同僚たちといっしょに働くことができ、魅力的だと思いました。

そして私はその飛行機であるスチュワーデスさんを見ました。その人は日本人でとてもペラペラな英語で外国の乗客にサービスをしていました。それを見て私は外国語を勉強する意欲が沸いてきました。「あ〜プロだな。あれ、本当のスチュワーデスの姿だな。私も必ずあんなカッコいいスチュワーデスになりたい！」と思ったんです。

日本人の乗客には日本語で、英語圏の乗客には英語でなどいろいろな国の乗客とコミュニケーションできたらいいなと思いましたが、外国語を自由自在につかっ、スチュワーデスとして乗客に最高のサービスをしたいと思いました。

スチュワーデスを夢みる人も多し、選抜条件も厳しく、私がスチュワーデスになれるという保障は正直いってありません。でも私は挑戦します。そして必ず航空業界にいらなくてはならないカッコいいスチュワーデスになりたいと思います。ありがとうございました。

私の大切な夢

金 智慧(慶山女高)・優秀賞

私は今夢に向かって歩いています。今歩いている道は一人で選んだもので、これは夢へ続く道に違いないと思います。まだ、具体的な職業については考えたことはありませんが、それは間違いなく日本語です。

中学1年のことでした。いつものように兄の部屋から音が聞こえてきました。でもそれはいつものゲームの音ではなかったんです。コンピューターのスピーカーから流れている歌声だったんです。すごく気に入って兄に聞いたら「日本のアニメの主題歌だよ」と答えてくれました。今考えてみればそれが私と日本語との出会いじゃないかと思いません。そのなかで、本当に気に入った曲はくり返して聞いたりもしました。歌を聞いたたびに常にいつの同じ考えが浮かびました。自分も知らずに歌のメロディーを口ずさむ時には驚きながらも、なんかうれしい気持ちになったりしたんですけど、それより悔しい気持ちももっと多くなりました。

日本語をはじめたばかりの時には「これが私の進むべき道だ。」と思わなかったが、勉強をするにつれて自然にそう思うようになりました。勉強するのはやっぱり楽しい事だけがあるのではなかったし、むしろ辛いとか面倒くさいと思ったことがたくさんありました。でも振り向いたら自分も知らないうちに成長した自分を見つけることができたし、それがすごく気持ちよかったです。

日本語の勉強を始めた頃には一人でしようと思ったんですが、すぐ勉強するに限界を感じるようになって塾に通いました。ひたすら頑張りました。確実な目標があるのでもなかったのにとても必死的でした。こうした日々を重ねながら、全然動きもないようにみえた日本語の実力もだんだん進んでいきました。「これがほんまの甲斐か」と感動してしまいました。何より歌の歌詩が分かることによるこびを感じました。だってきっかけだし、そして

歌手はなんか伝えたいから歌を歌うのに分からないのはすごく切ないからです。

私はそんなふうに勉強し続けたが、事情ができて塾を止めなきゃならなくなりました。ちょっと途方に暮れたんですが決心しました。目標を決めて勉強しようって。そしてこの前、先生に聞いた日本語能力試験に挑戦しよう決めました。初めから1級はちょっと無理かなと思ったあげく、2級に決めました。すごく緊張しながら、心配しながら勉強しました。そのおかげで一生懸命になったし、合格を望めば望むほど失敗することが許せなくなって慎重に準備し続けました。今考えればあの時に私の日本語の実力がもっとも伸びたと思います。結果は合格でした。何よりこれまでの私の努力が無駄ではなかったのが証明されて涙が出るほどうれしかったです。実際、泣きはしなかったんですけど。

あれが去年のことでした。今は1級の試験を準備しています。1級の資格の名を持ちたいのではなくただの目標です。やっぱり目標がある方が人を強くするからです。今までの私の努力が怠けで崩れる事は絶対みたくないんです。そのために今も頑張っています。

前にいったとおりに私がしたいことは確かです。周囲の人たちの言葉のように具体的な進路が決まっていないことはちょっと困ることかも知れませんが、大学とか職業は確かにすごく大事だし、いつまでも理想とか夢だけでは生きてゆけないし。でも無理に決めたくはないんです。私は自然に、もっとゆっくり進路を探したいです。

私は今、胸のなかに微かでも確かにある夢を育てて行きます。それがもっと丈夫になったら私の未来は絶対に大丈夫です。私はそう思います。ありがとうございました。

日本人の親切さと笑顔

李 ユナ(名門高)・優秀賞

みなさん、はじめまして。これから私が感じた日本人の親切さと笑顔についてお話をさせて頂きたいと思います。

私が、一昨年の夏休みに始めて日本を訪れた時のお話です。3泊4日の短い期間ではありましたが、その間に私はたくさんの素晴らしいものを感じることができました。その中でも一番、感心したものは何よりも日本人の笑顔でした。

通常、韓国では公式な場合以外で他人に笑顔を見せることはあまりありません。私もそうでした。滞在期間が短く日本人との交流は限られたものではありましたが、少なくとも私が出会った日本人は見ず知らずの他人なのにも関わらず、例えば、道を訪ねた際、笑顔で一生懸命に教えてくれました。いつも笑顔で接してくれました。それにとっても親切でした。案内に自信がない時は、周りにいる人に確認してから案内してくれることもありました。そんな日本人に出会って私は思いました。「なんて優しい人たちなんだろう」って。そう思ったら、不思議にも自然に心が和らぐようになって、いつの間にか同じように笑っている自分を見つけました。

韓国にいる時、日本人はととても親切だという話を聞いたことがありましたが、その時は「そんなの別に驚くほどのことでもない」と思っていました。なぜなら優しくしようとすれば、それは誰にだって出来る簡単なものだと思い込んでいたからです。でも、日本訪問中に本当の優しさに出会い、私が実際に経験してみようやく分かるようになりました。

言葉や理屈で考えるのは簡単なことでも、実際に実行するのはとても難しいことで理屈ではなく気持ちの問題なんだなあ~て事を。しかしその夏、韓国に戻ってから私は少しがっかりしてしまいました。いつも笑顔で優しくしてくれた日本人に比べて、韓国人はまるでどこか怒っているようにも見えるほど無愛想でした。

あの時、はっきりと思い知ることが出来たんです。笑顔だけでもこんなに人の気持ちが変わるということを。

韓国人もすこしだけ努力して笑えば、外国人が見ても日本に行ってきた私のように好印象を持つに違いないはず。なのにそうしないことが、残念でなりません。

ある人たちは日本人のその微笑みを建前だの、何を考えているのか分からなくて気持ちが悪いだのと言っていますが、それでも！人との関係が冷たくなって行く現代社会において、そういう小さな微笑みは一つの潤滑油になるんじゃないでしょうか。建前だって少しぐらいは持っていてもいいんじゃないでしょうか。その笑顔は、このあと外国との円満な交流関係を築くためにも必要になるはずです。韓国人も日本人のそういう所は学ぶべきだと思います。

私もこれからは私が会って見た日本人のようにいつも笑顔で暮らそうと思っています。皆さんも周りに対して、いつだって笑える人になってください。それでは皆さん、今まで私の発表を聞いてくださってどうもありがとうございました。

私の大好きな友たち

李 慧珍(南漢高)・優秀賞

こんにちは。私は残り少ない高校生活を送っているリ・ヘジンです。受験の真っ只中、こうしてスピーチ大会に参加させていただいて大変嬉しく思っております。スピーチを準備することが単調な日々の清涼剤となりました。私はこれから私の友たちについて話したいと思います。

人には多かれ少なかれ必ず友たちがいるものです。私にも同じく友たちがいます。そのなかでも私の大好きな友たちを紹介したいと思います。

14歳の冬、私はこの友たちに会いました。初めて会ったとき、彼女は私にこういいました。「はじめまして。私は日本語です。」そうやって私と日本語との友情がはじまったのです。

私は小さい頃からマンガがとても好きでした。マンガを読みながら日本語を習いたくなりました。それで、両親を説得して日本語学校に通うことになりました。日本語を教われば教わるほどもっと知りたくりました。いつも新しいものを求めてはすぐ飽きてしまう私にしては珍しいことでした。小さなきっかけで教わりはじめた日本語は面白いところをたくさん私に持ってきてくれました。

丸っこい形の文字とそれに応じるイントネーション、なんとなくくりくりと感じられる発音も実に興味深いものでした。また、聞いているだけで面白かった大阪弁、現代の若物たちのしゃべり方なども聞くのにおいて本当に楽しかったです。

そして、「きっと」、「ぜひ」、「必ず」のように韓国語では同じ意味のはずなのに使うときが少し違う

というところが日本語を美しくさせていると思いました。

もちろん日本語を勉強しながら難しいこともたくさんありました。漢字、敬語、韓国語にはない表現など。でも、楽しいことも難しいこともあったから今まで諦めずにやってこれたと思いました。それに、日本語は私をものすごく助けてくれました。

日本語を通じて、私はさらに韓国語を理解することができました。両国の言葉を対照しあせて理解することで、二つの国を私が繋げているように感じました。

私は言葉というのは文化とその人々を映す鏡だと思います。その人たちの言葉や文を通じてその人たちがどんな考えに基づいて暮らしているのかをわかることができますと思います。

日本語を学びながら、そうではない人よりは少しでも偏ることなく批判的に日本を見ることができました。私の友たちは私をすごく成長させてくれました。

彼女に出会ったのは細ことに過ぎないかも知りませんが、この出会いを通して私は自分のせまい視界を広げることができたのです。

もう「私の大好きな友たち」の話をそろそろ終えたいと思います。誰にでもいる「大好きな友たち」が私にとっては「日本語」でした。

みなさん、今まで聞いてくださってありがとうございました。

旅行をしながら出会った「日本人の親切さ」

金 昭姫(盆唐大真高)・優秀賞

みなさん、こんにちは。私はブندانテジン高校1年のキム・ソジョンです。

私は中学2年の時から日本語の勉強をしています。日本語の勉強をしながら日本や日本の文化などに興味がたくさんわいてきました。ある日、私はインターネットやテレビだけでしか見たことのなかった日本を直接経験したくなりました。「日本人は親切だ。人に迷惑をかけない。人を思いやる。」という言葉聞いたことのあった私は、このようなことを直接感じたかったのです。

そういうわけで私は、「ひとりで日本へ行ってみよう。」と思い、1ヶ月ほど準備をし、去年の11月に5泊6日の日程で日本へ行きました。言葉にできないほどのときめき感と緊張感をいただき、成田空港に着きました。まわりに日本語で書いてある案内板を見て、私は本当に日本へ来たということを実感することができました。

はじめの日は新宿を観光しました。写真で見たことのあったはなやかなネオンサインや建物を見ると、気持ちがわくわくしてきました。そのうち、私は道に迷ってしまいました。ひとりで地図を見ながらあわてていると、あるおばあさんが私のところに来ました。そのおばあさんは、私に「どこへ行くの？」と聞きながら、私が行こうとしているところまで親切に案内してくれました。私は「さすが日本人だ。」と感動しました。

もちろん、「日本人の親切さ」はこれだけではありませんでした。横浜を観光した日のことでした。突然、雨が降ってきました。傘を持っていなかっ

た私は、周りの建物のなかに入って雨がやむのを待っていました。すると、ある人が「傘のところがこわれているけれど、あげますよ。」といい、私に小さいビニール傘をくれたのです。その人のおかげで、気持ちよくその日の観光を無事に終えることができました。今も私はその傘を大事にし、その日を思い出したりします。

最後の日、私は上野公園に行きました。上野公園は日本らしい雰囲気がただよっていました。とてもきれいなところで写真を撮たくさん撮りました。私も写真にうつりたくなりました。そしてひとりで写真を撮ろうと思い、公園のベンチにカメラを立てていました。すると、あるおじいさんが「私が写真とってあげましょうか？」と私にいいながら私の写真を撮ってくれました。

親切な日本人は最後の日まで私を感動させました。私の旅行は「日本人の親切さ」といっしょにした旅行に違いありません。

普通、日本をよく知らない人たちは「日本人の親切さはかざりけだ。」とよくいいます。しかし、私はそうは思いません。「日本人の親切さは、真の親切だ。」と、旅行をしながらわかったからです。

私は、旅行をしながら出会った「日本人の親切さ」そして、そのほほ笑みを忘れられません。私に大切な思い出をつくってくれた日本人のみなさんに「ありがとう。」という言葉がいいながら、私の話を終わらせていただきます。ありがとうございます。